

ふるさと再発見!

vol. 6

ほらほらわかやま

HOUBO

WAKAYAMA



FREE

巻頭特集

紀州古代墨

●紀州の歴史・文化
徳川治宝侯が愛した瑞芝焼

●散策
粉河でぶらり犬樹めぐり

●施設紹介

図書館探検隊

司書が選ぶ郷土の本

シリーズ道の駅

「みなべうめ振興館」



表紙の書：紫舟【シシユー】

書道家。六歳から書始める。書の本場奈良で三年間研鑽を積み、のち東京へ。NHK大河ドラマ「龍馬伝」をはじめ、外務省「APEC Japan2010」、ハリウッド映画「エアベンダー」やSUZUKIアルトCMなどに作品を提供。朝日新聞や読売新聞でも長く書の連載をもつ。海外では「パリコレ」への作品展示や国際会議での招待公演、国立現代美術館での展示など幅広く活動。書「龍馬伝」で第五回手島右衛門賞を受賞。

http://www.e-sisyu.com

photo by T.Kurimoto

紀州古代墨

消滅と復活、古の墨を訪ねて



しょうえん
松煙の原料となる松が豊富だった紀州。当時の墨作りとはどのようなものだったのか。紀州古代墨の歴史をたどってみる。

この墨

いか程のものぞ

試みよ

紀州では、いつから墨作りが行われていたのだろうか。

建長6年（1254年）に

伊賀守橋成季によって編纂された「古今著聞集」に次の

ような説話が残されている。後白河院が熊野詣で、藤白の宿に着いた時のこと。紀伊の国司（現在の県知事にあたる）が松煙墨を献上したところ、後白河院の「この墨いか程のものぞ試みよ」という言葉に、御前に居た左大臣が



古今著聞集

すみ
墨は、煤と膠を練り固めて作られる。煤は不完全燃焼を起こした際に煙の中に生じるもの。膠は動物の皮などから抽出されるゼラチン質。煤は松を燃やしてとる松煙、菜種などからとる油煙に大別され、近年では量産しやすい重油からの生産もされている。松煙墨や油煙墨は現在、ほとんど作られていない。当時の墨作りとはどのようなものだったのだろうか。

墨は石墨にはじまり、墨丸そして、松煙と進化してきた。松煙は紀元前200年ごろ、中国で現在の墨の原型といえる墨ができた。その墨は漆で固めたものだった。その約400年後、膠で固めるという現在の墨と同じものが作られるようになった。

日本には、推古天皇18年（610年）に高句麗の僧・曇徴が製紙・製墨の技術を伝えたという記録が残っている。

右大将に薦められたところ、右大将は碗を引き寄せ、墨をすつたが、そのすり方が除目（大臣以外の官吏を任命する儀式）のとおりであったので、左大臣が感心したという。

後白河院の熊野詣は永暦元年（1160年）に始まり、建久2年（1191年）まで34回に及んでいるが、このころに国司が献上するほどの出来であったということ考えると、1000年ごろには墨作りが行われていたのではないかと推測される。



取材協力 平岡繁一氏
海南で作られていた藤代墨を復元し、現在も体験授業などの活動を通じて墨作りを伝える郷土史家。
お問い合わせ
かいなん夢工房
海南市名高533の4(1番街)
TEL 073-482-5572

する墨のその藤代の秋かけて
たえぬ七日の梶の玉づき
あふことと松にかけたる藤代の
墨の名しるるき梶の玉章
冷泉為重

幾千歳松にかけたるたかき名も
なお世にしるるき藤代の墨
冷泉為久

「紀伊名所図絵」によると、
当時の藤代墨は墨屋谷（現在
の藤白神社の南東）と呼ばれ
る場所で作られていたとされ
る。熊野詣の入口にあたるこ
の場所では、宮人や歌人がそ
の様子を眺め詠んだ歌も残っ
ている。

寛保2年（1742年）京
都の冷泉家より紀州藩に「古
歌に詠まれていた藤代の墨は
どうなっているのか」との間



藤代墨（海南歴史民俗資料館）

い合わせがあった。
しかし、墨作りはとうに
絶え、知る者もなく、調
査されたということが
名高専念寺の全長という僧
の「名高浦四囲廻見」に記さ
れており、湯浅に残っていた
二つの古墨を提出したことが
「速水見聞私記」に墨の型と
ともに記されている。



梅仙墨（海南歴史民俗資料館）

その後、紀州藩の六代藩主
徳川宗直が当時の湯浅村に住

む橋本治右衛門に藤代墨の再
興を命じ、紀州藩の公用品と
され珍重されるようになった。
また、このころは「藤代
墨」から「藤白墨」へ、原料
も松煙から油煙へと大きく変
わった。

この藤白墨も天保13年
（1842年）に廃絶した。

その後、明治初期に入り田
辺の鈴木梅仙が藤代墨を研究
し、「梅仙墨」として名墨を
残しているが、梅仙没後途絶
えてしまった。



明治時代の墨作りの様子



春日神社 紀州松煙墨の書き初め

海南市にある春日神社は、朝
廷より正一位を与えられた格式
の高い神社で、聖武天皇から代々
の祈願所として厚い保護を受け
ていた。熊野古道の休息するこ
ろに設けられた九十九王子社
のひとつである「松代王子」が
春日神社に合祀されており、ご
神体はなぎの葉の形をした墨だ
そつだ。



松代王子が祀られているお社のご神体は「なぎの葉」の形

春日神社で
は、「紀州古代
墨席上書初会

という小中学生を対象とした書
き初め会を毎年元旦と2日に催
しており、松煙墨を墨汁にした
ものを使っている。松煙墨で書
かれた書は青みがかった艶のな
い黒色になり、味のある落ち着

いた色合いを楽しむことができ
る。書いたあと、松の香りが一
面に広がるのも特徴だ。
この書き初め会は今回で16年
目を迎える。松煙墨は、江戸時
代や現在など何度も復元されて
は忘れられてきた。「和歌山が誇
る文化の一つなので、まずは地
元に根づかせたい」と思いこの書
き初め会を始めました」と、主
催である春日神社の三上秀信宮
司は語る。海南市の小中学生に
は参加が多く、松煙墨の存在は
広まりつつあるという。

この書き初め会は予約の必要
もなく、当日訪れても大丈夫と
のこと。古代から伝わる墨「紀
州松煙墨」をつかう感動を味わっ
てみては。



取材協力
三上秀信 宮司
お問い合わせ
春日神社
海南市大野中 577-1
TEL 073-483-7547

紀州古代墨の現代

日本でただ一人、原料の松
煙から松煙墨を作り続けてい
る人物がいる。田辺市鮎川で墨
工房「紀州松煙」を営む堀池雅
夫氏だ。現在の墨作りとは…

松煙作りに使う松には、立
木の皮をはいでしばらくおき、
松脂がのってきた部分を切り
出して使う「生き松」と、自
然と枯れた松を切り出す「落
ち松」がある。今では松山自
体が少なくなっただため「落ち
松」を集めて松煙を作る。

江戸時代には「障子焚き」
といい、障子で囲った小さな
部屋の中で松を燃やすこと
で、障子にたまった煤を集め
る方法が用いられた。現在は、
障子の代わりに目の細かい金
網が使われている。

ほうぼう



松煙焚き
細かく切った松をゆっくり燃やすことで、
煤が生じる。



煤とり作業
とったばかりの煤は空気を含むため、
ふわふわしてとても軽い。



膠と練り込む
良質の膠。これを溶かして煤と練り合わせる。



型入れ
墨を成形する木型。
堅くて木目の少ない梨の木が使われる。



乾燥作業
灰は備長炭の炭がまからとれたもの。



完成

煤作りは、細かく切った松
を小さな炎でゆっくり燃やす
ことが重要になる。そのため
5分おきに松をくべ足すこと
を繰り返す必要がある。
500kgの松を100時間
燃やして、ようやく10kgの煤
がとれる。ここからゴミを除
き、重りをかけて嵩を沈める。

こうして集めた松煙と膠
を、乳鉢に入れ時間をかけて
練る。そして粘土状になった
墨を木型に入れ形を整える。

この木型は一つだけなら誰
でも作れるが、量産するため
には同じ型がいくつも必要に
なる。そのようなまったく同
じ型を作る職人は現在では
一人だけだという。

型から取り出した墨は水分
を含むため、灰の中に新聞紙
に包んで入れ、乾燥させる。

また堀池氏は様々な色の
「彩煙墨」や「油煙墨」、白樺
を使った墨作りなど、伝統を
守りながらも新たな取り組み
に挑戦し続けている。



取材協力 堀池雅夫氏
お問い合わせ
墨工房 紀州松煙
田辺市鮎川字小川
TEL 0739-49-0801